

## ★講演★

# むずかしい今の幼児教育

関口はつ江

## 現場の悩み

私は、幼稚園の現場を担っているのですから、学問的な問題や、こうした方がよいということよりは、現実にどう対処しようかということの方が頭を占めております。

今、一番感じておりますのは、なぜ幼稚園の現場で、"こうあるべき"と思っていることが、素直に伝わっていかないのか、ということです。私自身が自分の幼稚園を通してすら、親に対しても、地域社会に対しても伝えることができない、実践したいと思っても実践できない、ということがあるわけです。ましてや短大で育てた学生を通じて、実践し

てももうように働きかけても、なかなかそういうはいきません。それが一体どうしてなのかを考えるために、まず現状をお話ししてみたいと思います。

まず、保育がうまくいく為には、子どもを取りまく社会と、直接子どもに関わる家庭、親、それに保育を担当する保育者との間の融合が必要で、調和がなされている時にスムーズに行くのではないかと思います。そういう角度で現状を見ますと、まさに幼稚園を支えている社会的状況がばらばらであることに気づきます。社会的には文部省、公立・私立の幼稚園、県当局や教育委員会の立場などがあります。そういういろいろな立場の人と関わる機会を持つことがあるのですが、

その時にいつも行き方、考へていることの方向がまるでちがうことを感じさせられます。

それから、親の方を見ますと、親もまたいろいろなことで、子どもに期待するところがまちまちです。そして、保育者の方も、何を考へていいのやらわからないということがあるように思ひます。

そういう環境が非常に悪いことのために、保育の現場で教師が子どもに関わるとき、子どもの中に深くわけ入る、とか、子どもを包みこむ、とか、ないしは子どもと一体になりながらということはしにくくなってしまっている。むしろ子どもを突き放して、対象として把えながらその子どもの中に何を育てていくか、どういうことができるようになさせるか、というふうな、いわゆる「与える保育」というのでしょうか、そういう形になりやすくなっていると思います。具体的にどういうことがなくとも、感じとしてどうも子どもと保育者がしつくりしない、ゴソゴソした不協和な状態があるようです。

それで、実際に学生や現場に出た人たちについてびっくりしたことがあります。今年保育科に入ったばかりの学生に、「保育とはどういうことだと思うか」と勉強に入る前に話さ

せてみました。そうすると、それは、教えるとか型にはめることではなく、子どもの発達を助けるとか、引き出す、一緒に遊んで生活を導くというようなことが返ってきました。これはだいぶ保育についての一般的の認識が進んできたと思いまして、嬉しかったのですが、その後、新任教諭の研修会の時に、そこに集まつた先生達に同じ質問をしてみました。ところがそこでは、入学前の練習をさせる、集団への適応、しつけ、基礎的能力をつけさせる、など、いわゆる就学のための準備期間であるという答が全部の人から返つて来たわけです。このすれば何なのだろうかと驚きます。

本来、子どもを育てる、保育をすることは教えたり、訓練することとイコールではないことを知つていたはずなのに、そしてそれを教えて来たつもりなのに、一たび現場に足を踏み込んでしまうと、そういう考えが通用しない現実になってしまいます。

そういうふうに変つてしまふことの原因の一つに先程、環境の問題を出しましたが、私の最近の体験から例をひいて具体的に考へてみたいと思います。

私共の幼稚園のそばにもう一つ学校法人の幼稚園があります。これは、して、その間に新しい園が出来る動きがあります。これは、幼稚園の適正配置ということからして問題があり、幼稚園間に混乱を起すことになります。私立幼稚園では園児の獲得が大事になりますから、経営優先の幼児教育になりがちです。十分な数の園があるのに新しい園ができますと混乱を引き起こことになるので、何とかやめさせるようにした方がよいのではないかと、県や市にお願いしたり、いろいろなことをしたわけです。結論は出ていないのですが、市に訴えますと、市当局は私立幼稚園の認可には何ら権限がないのだから、自分で解決すべきだ、という姿勢なんですね。県の方はどうかといえば、県は認可基準に合えば認可せざるを得ない。もし、認可しないで行政訴訟を起されれば県は勝ち目がない、といいます。

そういうふうにして、幼稚園が乱立します。他の地区もそういうふうはあると思いますが、文部省が就園率を上げよう、ということで園の設置に対しても補助をしていますが、新しい園ができるいくことが、本当に良い教育を進めるにどれだけ役立っているかといえばささか疑問になります。新しく認可になつた幼稚園の場合、保育の内容、姿勢が一般

に目立つような特定の教育、知能教育をするとか、ある特殊のことを教えますとか、スクールバスを親切に回しますとか、施設が冷暖房完備ですか、教育的な観点からは、首をかしげなければならないようなことを売りものにして子どもを集めことが多いのです。そうしますと、既設園で、良心的にコツコツと目立たない仕方で地味に保育している園が、それでは立ち打ちはできなくなるということで、何か目立つことをはじめます。悪循環になつていきます。

それではなぜ、目立つことをやる幼稚園がはやつていくかを考えますと、親の要求や好みによって、ということになります。そのような事象を考えてみると、教育の流れを作っているものが教育者ではなく、社会常識や、他領域の考え方方が教育の流れを作つていて見えてきます。保育界を支配している考え方方が、如何によい人間を形成するかという教育的な観点ではなく、もっと別な観点、経済的な、社会的な視点であつて、それに基いて教育の内容が決められてしまう、そこに大きな問題があるように思います。

以上は、私幼の場合ですが、一方、公立幼稚園はどうかといいますと、多くの公立幼稚園は小学校の校長先生が園長を兼ねていらっしゃいます。

どうしても、幼児の特性に基いた教育よりは、小学校教育をそのまま引き下げるような形で教育が行なわれる傾向があるようです。

このようにみてきますと、保育者が一生懸命考えて幼児に即して保育したいと思うことと、園長や設置者が期待するこどとの間に厳しい対立や矛盾があることがわかります。

### 保育者の問題

そういう状況の中の保育者はどうなっているのか、といいますとここにも大きな問題があります。保育者が本当はこうしたいと思うことと、上からこうしなさい、といわれることの間にギャップがあるので、保育者が全く主体的に行動しなければならないのですが、最近の保育者には、主体性が欠けるということがいわれています。もちろんむづかしさありますようが。

園長と教諭の体質の違いがそれです。園長の小学校の経験が長かったり、教育畠の出身でない人であつたりしますと、保育者とは経験やものの見方が異質になり、体質が違つてきます。小学校以上の場合は、校長と先生方は同じような経過で勉強し、同じ道を歩んで、先輩、後輩という関係で指導さ

れますが、幼稚園の場合は、先生方は養成校を経て、一応子どもたちの勉強はしていますが、園長が幼児のことについては素人だということが多いわけです。素人に指導、指示されながら保育しなければならないのですから、ずい分大変なことです。

保育者に主体性がない、ということに関連しますことの一つに、最近の保育ブームによる保育者志望者の増加が考えられます。この間の小学生対象の調査でも、女の子に一番人気があつた職業は保育者であったそうです。しかし、保育者になりたい人が広がる程、それが一般的な仕事として、ある訓練を受けさえすれば、またある技術を身につければできる仕事であると受けとめられ、本人の生き方や在り方に深くかかわる仕事とは考えられなくなってしまいます。

また、今の若い人たちが育つってきた状況を考えると、生活自体が分業化し、他の人に頼つて暮す領域が多いため、自分の生活全般を自分でとりしきつていく、自分のことは自分が決めていく、主体性が失われやすい状況だと思われます。本当に自分はどういうふうにしたいかというよりは、他人様に意見を伺つて、その指示に従つて、その通りにすればいい、ないしはその通りにしなければならないと思つてゐるこ

とがあまりにも多すぎるようです。

この間、ある研究会でのエピソードですが、音楽リズムに関した集まりで、ある先生が、「鼓笛隊指導をしなければならないのですが、鼓笛隊の編成はどうすればよいのですか。」と質問をしました。助言の先生が一言のもとに「それは自分で決めることです。」と言われました。こんな単純な例からしましても、自分の耳で確かめたり、こういう音を子ども達と作ってみたいという自分の中のイメージがない。もつと極端にみれば、子どもと共にその活動をこういうふうにやりたいという主体的な要求がなくて、ただ形だけそれをやればよいというような、保育者の姿勢があるんですね。

### 親の在り方

次に最近の親の特徴について考えてみましょう。今の方は非常に経済優先の考え方なんでしょうか。月謝を払っているのだから、何かやつてもらうのは当然だという意識が強いようですね。子どもを幼稚園に入れたために、自分がいろいろしなければならない、お弁当を作らなければならないなど、仕事が増えるとすると、それは困る。お金を払って子どもを見てもらっているのだから、当然自分の労力は軽くなら

なければならぬ、支払った分に見合つただけの見返りが子どもの中にあるべきだと考えるようです。例えば、歌を何曲覚えたとか、絵を描くことが上手になったとか。

幼稚園の父兄との懇談会で、父兄からはつきり要求が出たりします。「先生、一月に二曲ぐらいは新しい歌を教えて下さい。」というのです。「そういうことは、子どもの音楽性を伸ばすこととあまり関係がないのではないかですか。それはただ、おかさんが満足するだけではないのですか。」といいますと大変不満な顔をします。そのような事例に出会いますと、親の教育への要求といいますか、期待というものが、非常に即物的になっていることがわかります。

どうして、今の親にそういうことが起つてくるのか、私なりに考えた単純な考え方ですが、生活の仕方がすべて合理的になってしまいまして、これだけのものを投入すればこれだけのものが返ってくる、「インプット＝アウトプット」になるのだから、何かやつてもらうのは当然だという意識があるのではないでしょうか。沢山投入しても何も出でこない。六十円入れば牛乳が出てこない、ということには我慢ができない。けれども、子どもの教育の場合にはいくら投入しても、その結果が出てくるのはずっと先であったり、外にはその効果が

出でこながつたり、場合によつては投入しつ放しで終ることもあります。にもかかわらず、それは信じられない。そういう不合理は信じないという習性が今の人たちには多いのではないでしようか。

生活の仕方を考えてみると、例えば農業では、土地とか自然の恵みがあつて、自分が働いたこと以上のものが、いろいろなものに支えられて沢山返つてくることがあります。また、商売の家ですと、家名とか家柄とか、伝統があつて、自分がやつたものに、今返すと続いたものが一緒になって結果が返つたりします。また、全くその逆もありましょう。ところが、現代の給与所得育の暮しでは、何日間、何時間働いて、それに対していくらのお金が返つてくる。ちょうど自分の努力と見返りがイコールになるといふような暮し振りです。沢山働いたけれども少しも返つてこなかつたとか、余り働かなかつたのにいろいろな恩恵によつて多くのものが返つてくる、ということはありません。こうして、生活の回転が数字で説明できるような暮し方によつて、教育に對しても、何か直接的に割り切つて説明できなければ満足しないようなところが、出来てきたのではないでしようか。

### 幼稚園は何をしてやれるのか

子どもにとって大切だと思ふことや、本質的な事がなかなか実践に移されないという事の中で、さらに突つ込んで考えさせられるのは、一体今の子どもたちの生活の中で、幼稚園

こういうことをとりまとめて考えてみると、状況はとてもむずかしくなつてきます。本質的に子どもたちに大切だと思ふこと、あるいは、親に大切だと思うことをわかつていただきたいと思うのですが、その通りにいかないわけです。行政や園の経営者の方向がまちまちであつたり、親は外に現われた保育の効果を求めたり、保育者は、自分が何を為すべきかの本音で行動できないというような状態ですから、互いに孤立したばらばらな関係にあります。暗黙のうちに認め合うことがなくて、何か明確な外側の基準が欲しくなるのですね。何をどこまで教えればよいかということをよく聞かれるようになるわけです。どう教えればよいかという技術講習会や研修会が繁盛していますが、結局講習会がはやつても、それは保育者が安心して力一杯保育がやれるようになるための問題については、何も解決することにはならないと思うのですが、そういう現状にあるということです。

の必要性はどこにあるのだろうか。幼稚園は子どもたちに何をしてやることができるのであるかということです。幼稚園で子どもたちにやってあげられることが、子どもの本質に関わる事ではなくて、末端でしかないとすれば、それでいいのか、或はそれだけしかしてやれないのが幼稚園というものなのかということにすらなるわけです。

私の幼稚園に関する経験の中で感じることは、子どもたちがだんだんひ弱になり、「ボスのような子どももいなくなつて、何となく飼いならされたおとなしい、おとなが扱いやすい子どもが多くなつて来ていることです。しかし、逆に見れば幼稚園の先生たちは、そのような子どもに対する期待している面がないとはいえないのではないかとも思われます。教材や遊具、活動場面を子どもたちが活動しやすいようにと考えて、工夫して提供するわけですが、こういう物で活動したり生活することが、本当に子どもたちをよく創ることになるのかどうか考えてみなければなりません。

よくいろいろな方の話に、本当の人格を創ってくれたのは、箱庭的な幼稚園の生活ではなく、その外側にあった生々しい、もつと苦しかったり悲しかったり、嬉しかったりいろいろあるけれども、もつと危険をはらんだ生活の中であった

ということが出でてきます。園では、いろいろなことに子どもが興味を持ったり、関心を持たせたりするために場面や教材は与えられます。確かに興味や関心は育つかもしれませんが、そこで終つてはいないか、もっと突つ込んでいって、その中から子どもが自分のものとして心に止めたり、自分を開できているのでしょうか。

実際に子どもたちが喧嘩をしていたり、危険に出会つている場面に遭遇すれば、保育者はなんとかうまく解決させようと導きます。これが教育的関わりだと思います。危険に直面している子どもを見捨てて行つてしまふような先生は、非教育的であると考えられますが、そうした苦しい体験の中で育つてくるものもあることは否定できません。教師の教育的な配慮や関わりが子どもを育てる部分は沢山ありますし、そのつもりで教育の仕事にたずさわっているのですが、先生の扱い方が適切にスムーズにくくなつたために、子どもの中に強いものが育ちにくく、ということも考えられます。

これは、ある意味では一つの宿命であるかもしれません。子どもを可愛いと思い、理解が進んできますと、子どもを冷酷に扱つたり、活動しにくい場を作つたりはしなくなりますから、——こうして、本当に厳しい、生の体験を幼稚園が子

どもに体験させてやることができないのだとしたら、それは鼓笛隊をさせるとか、おけいこブックをやるとか、技術的な事をやるのと五十歩百歩なのではないかとの悩みをもつています。

文化が進めば進む程人間がひ弱になつて来ているといわれています。幼稚園の教育も進めば進む程ある部分を落としてしまうことがあるのかもしれません。バランスよく考えれば、子どもたちに文化の先を進めるよう高度な知識や技能がもてるようないろいろな筋道を提供してやる側と、原始的に自分の本性に立ち戻った根源的な生活を存分にさせてあげることと、二つの役割が幼児教育にはあるのだろうと思います。しかし、現在の幼稚園の既成の枠組の中では、そのどちらもしてやれていないのではないかとの反省を持つております。

そこで、今保育者にどういう事が必要なのかと、私なりに考えておりますことは、ひとつは保育者養成の側から、技術指導ができるだけ排除してみたい、子どもが生きていくといふ中心的な課題にだけ目を向ける、ということを試みてみたは、どうかと考えております。もう一つは、保育者の個性を強くするようにしたいと思います。保育を志望する方は穢やか

で、良心的で、言つてみれば可もなく不可もない傾向があるといわれます。目立たない、平凡で、堅実ではあるが、リードーシップはとりにくいタイプが多いといわれ、人の先に立つよりも、人に従うという姿勢がどうしても強くなる。皆に合せていましょうとか、人に聞いてから問題なく処理しましょうという傾向が強いのではないでしょうか。保育者になる過程でも個人的な責任とか、その人の個性を發揮する機会が失なわれていて、一つのコースで、ある決ったところまで修得できればそれで幼稚園の先生になれるようになってしまっています。しかし、ひとりとひとりが目立った存在で、自分の個性を發揮しながら生活して行く中で、保育を主体的に担うことができるようになつてほしいと思っています。

いろいろな状況を考えてみまして、今の現場の問題を解決することができるはどうしても当事者以外にはなさそうだ。保育を担っている先生方がどれだけ頑張れるかにかかるところが、どうしてかと感じております。

(郡山女子短大)

〔一九七八年九月一日に幼稚教育  
現職研究で行なわれた講演より〕